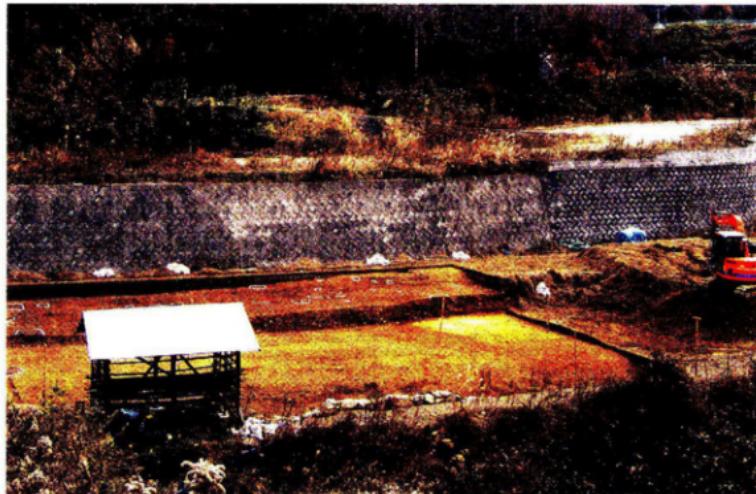


成合寺遺跡発掘調査概要報告書・I



平成18年3月

熊取町教育委員会

はしがき

古代から熊取野とよばれた本町域は現在まで変わることなく「熊取」として独立した地域を保持し恵まれた自然と貴重な文化遺産を今日に伝える町であります。

町内には重要文化財中家住宅をはじめ有数の文化財が知られていますが、他に埋蔵文化財包蔵地として45ヶ所を数える遺跡があるなど、町内全域に遺構や遺物が埋蔵されています。

本書は平成16年度に（仮称）熊取町墓地公園及び自然公園緑地整備事業として実施した発掘調査についての報告書として作成したものです。今後多方面においてご活用いただけるよう願っております。

最後になりましたが、本年度現地での発掘調査にあたって御協力をいただきました関係者各位に対しましてここで厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

熊取町教育委員会

教育長 甲田 義輝

例　　言

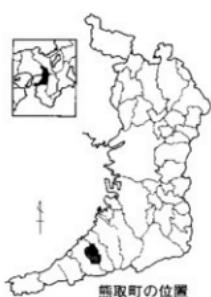
1. 本書は、熊取町事業部公園課による（仮称）熊取町墓地公園及び自然公園緑地整備事業に伴って、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係が実施した発掘調査（成合寺遺跡04-1区）の概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳を担当者として、確認調査を平成16年3月1日～同年3月9日の間に実施し、その結果に基づいて本調査を平成16年12月16日～平成17年2月10日の間実施した。
3. 本書における図面の標高は、T.P.（東京湾平均潮位）を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。
4. 本書における図面の上色は、「新版標準土色帖」第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。
5. 本書の執筆は熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳が行った。
6. 本書の作成及び発掘現場での作業には、次の調査員・調査補助員・作業員の参加を得た。
　　関井澄子、前田公子、森田亨子、山本恵子

目 次

第1章 熊取町の埋蔵文化財について	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 周知の遺跡	2
第2章 調査の概要	4
第1節 近畿自動車道和歌山線建設に伴う大阪府教育委員会による 埋蔵文化財発掘調査について	4
第2節 成合寺について	4
第3節 雨山について	4
第4節 試掘調査	6
第5節 本調査	8
第6節 層	8
第7節 遺構	8
第8節 遺物	6
第3章 まとめ	23

第1章 はじめに

第1節 地理的環境



本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているために年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることが出来る。

第2節 歴史的環境

遺跡数は平成17年12月現在で45ヶ所を数えるようになっている。

縄文時代以前の遺構は発見されていないが、野田遺跡の所在する熊取町野田の町立中央小学校で縄文時代早期の有舌尖頭器と石鎌が検出されている。

弥生時代の遺跡も発見されていない。JR熊取駅のある大久保における駅前整備事業に伴う平成元年の発掘調査では畿内第V様式を示す上器が大量に検出され大久保E遺跡となったが、その土器は古墳時代初頭の所産と考えられている。

古墳時代の遺跡として、町中央部の山の手台住宅に五門古墳と五門北古墳が記されているが、既に開発で消滅している。

飛鳥時代については、平成10年度の久保城跡98-1区の調査で複数の溝が検出され、その中から飛鳥第V様式といわれる土師器や須恵器を検出している。

奈良時代についてはこれまで東円寺跡（現：野田遺跡）87-1区の調査で建物4棟と土壙、須恵器、土師器が検出されたのみにとどまっていたが、10年度に久保で須恵器杯や製塩土器等の上師器を含む3本の溝群、平成11年7月熊取町七山（七東山遺跡）で西暦750年以降の奈良時代を示す多くの須恵器が相次いで検出された。また小垣内においては、平成13年度の試掘調査で中世の土器とともに奈良期の須恵器破片が出上している。これらのことから熊取町全城は奈良時代には本格的に開発されていたものと考えられる。

平安時代については、野田の熊取町役場付近に想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された軒瓦の比較考察から平安時代末とされている。また平成8年度には大久保から紺屋にかけての私立病院の発掘調査で黒色土器や須恵器、土師器が自然流路内から検出されている。

鎌倉時代以降中世に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示している。野田の野田遺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡では瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出されている。平成13年度には小垣内で幅10m程の溝跡（溝）が見つかり、第42番目の「小垣内西遺跡」となった。

戦国時代については和田の重要文化財来迎寺の新本堂建設工事の際、境内から多数の16世紀の土師器皿や瓦片が出土した。

江戸時代の特異な遺跡としては、五門の重要文化財中家住宅およびその周辺遺跡、大久保の重要文化財降井家の降井家屋敷跡がある。平成13年度の中家住宅東側隣接地での調査では、実際に5,500枚の土師器皿や軒丸瓦片が出土した。

第3節 周知の遺跡

周知の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時代	地目	立地	面積	主な成果等
1	降井家書院	建造物	室町～江戸	宅地	平地	4,000m ²	国指定重要文化財
2	中家住宅	建造物	室町～江戸	宅地	平地	4,500m ²	重文・江戸期から明治頃の陶磁器・土師器検出
3	来迎寺本堂	寺院	鎌倉	倉	七地	丘陵腹	3,100m ² 重文・15～16世紀の陶磁器・土師器検出
4	池ノ谷遺跡	散在地	旧石器	水田	平地	62,300m ²	
5	中田家住宅	建造物	江戸	宅地	平地	5,000m ²	
6	東門寺跡	寺院跡	平安～江戸	七地	平地	48,000m ²	瓦・土器多数出土。寺院の形態は不明
7	城ノ下遺跡	城郭跡	室町	宅地	丘陵	61,800m ²	
8	成合寺遺跡	寺跡	室町	町	山地	丘陵腹	69,000m ² 14世紀代の600基以上の土塙墓群等検出
9	高藏寺城跡	城郭跡	室町	山林	山頂	34,800m ²	十井・堀切等の遺構を確認する
10	雨山城跡	城郭跡	鎌倉	山林	山頂	45,300m ²	月見ノ亭・馬場・千畳敷の地名が残る
11	五門遺跡	散在地	古墳～江戸	宅地	丘陵	2,300m ²	土師器片等が検出される
12	五門古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	1,900m ²	現在消滅
13	五門古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	1,500m ²	現在消滅
14	大浦中世墓地	墓地	室町	墓地	平地	18,400m ²	享徳四年(1445)銘の五輪塔地輪等出土
15	久保城跡	城郭跡	鎌倉	水田	平地	86,300m ²	飛鳥期の溝から須恵器・土器富・他瓦器多い
16	山ノ下城跡	城郭跡	鎌倉	宅地	平地	6,800m ²	
17	大谷池遺跡	散在地	古墳～江戸	池	平地	51,400m ²	
18	祭礼御旅所跡	祭礼跡	室町	山林	丘陵	6,300m ²	五門・袖屋共同陪地
19	正法寺跡	寺院跡	鎌倉	宅地	丘陵	55,000m ²	
20	小坂内遺跡	寺院跡	江戸	道路	丘陵	7,000m ²	足利門跡、現在消滅
21	金剛法寺跡	寺院跡	室町	宅地	平地	5,100m ²	大森神社神官寺
22	鳥羽城跡	城郭跡	室町	山林	丘陵	72,600m ²	
23	笠ノ谷遺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵腹	32,000m ²	
24	花成寺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵	28,000m ²	
25	降井家垣敷跡	垣敷跡	室町～江戸	宅地	平地	12,000m ²	星敷地を区画する溝や近世の陶磁器等出土
26	大久保A遺跡	散在地	江戸	宅地	平地	8,100m ²	
27	下高田遺跡	条里跡	鎌倉	山川	平地	5,700m ²	
28	大久保B遺跡	集落跡	弥生～江戸	宅地	平地	47,800m ²	弥生末～古墳初期の遺物
29	雄星遺跡	散在地	古墳～江戸	宅地	平地	22,400m ²	奈良～平安期の河川跡検出
30	白地谷遺跡	散在地	室町～江戸	川	谷	129,600m ²	
31	大久保C遺跡	散在地	室町～江戸	宅地	平地	4,500m ²	
32	千石庵城跡	城郭跡	室町	山林	丘陵	1,000m ²	天正年間(1573～92)の雜賃衆の城跡
33	口無池遺跡	散在地	平安～江戸	宅地	平地	11,200m ²	平安末～鎌倉初期の遺構、遺物
34	大久保D遺跡	散在地	鎌倉～江戸	宅地	平地	9,200m ²	
35	大浦遺跡	散在地	鎌倉～江戸	川	平地	4,900m ²	13～14世紀の瓦器等検出
36	久保A遺跡	散在地	鎌倉～江戸	宅地	平地	4,400m ²	建物跡、8～14世紀の土器
37	大久保E遺跡	集落跡	弥生～江戸	宅地	平地	2,900m ²	弥生末～古墳初期の遺物多数
38	久保B遺跡	集落跡	鎌倉～江戸	宅地	平地	5,000m ²	13～14世紀の瓦器等検出
39	中家住宅周辺遺跡	集落跡	室町～江戸	宅地	平地	21,300m ²	近世の陶磁器多数
40	朝代北道跡	散在地	鎌倉～室町	宅地	平地	60,000m ²	13～14世紀の瓦器等検出
41	七山東遺跡	散在地	奈良～室町	川	地	80,000m ²	古代須恵器・土器・瓦等検出
42	小川内西遺跡	集落跡	奈良～室町	宅地	平地	3,600m ²	古代須恵器・瓦器・瓦等検出
43	大久保F遺跡	集落跡	弥生～室町	宅地	平地	1,436m ²	石錐・平安頃の建物等検出
44	野田遺跡	集落跡	鎌倉～江戸	宅地	平地	250,000m ²	縄文石器・古代～近世の集落
45	小川内中道遺跡	集落跡	奈良～室町	宅地	平地	3,500m ²	中世の集落

熊取町遺跡分布図



第2章 調査の概要

第1節 近畿自動車道和歌山線建設に伴う大阪府教育委員会による埋蔵文化財発掘調査について

成合寺遺跡は熊取町の南部、熊取町成合に所在し、昭和59年4月15日から同年11月30日までの間、日本道路公団の近畿自動車道和歌山線建設に伴って大阪府教育委員会及び財團法人大阪文化財センターが本調査を実施している。(5頁図参照)

この調査では室町期の土壙約600基や、近世の石垣ほか、掘立柱建物跡、河川の護岸跡などの遺構と、凹基無茎石錐を含む石器類、瓦器、土師器、青磁、瓦類、五輪塔など時代幅の広い遺物が出土している。この土壙については脂肪酸の分析まで行われており、人体と特定はされなかったものの動物遺体が埋められていた事実が報告されている。

第2節 成合寺について

昭和57年3月刊行の「熊取町の寺院」によると、成合寺は14世紀に曹洞宗永平寺派の末寺普陀巖山として現在の地に建立されたとされている。かつて熊取を含む周辺地域一帯の庄屋であった中家には土地売券を中心とする15世紀代以降の「中家文書」を残し、明応3年(1494年)の文書に成合寺の名前があることから、成合寺はこれより前に建立されていたことになる。周辺には民家も無く近年まで無住だったが、平成13年不審火によって全焼してしまった。成合寺をはじめとする熊取町の寺院についての本格的な調査が行われた経緯がないために、それぞれ詳細不明であるが、焼失する以前の成合寺の堂宇は、江戸時代の建築物だったらしい。

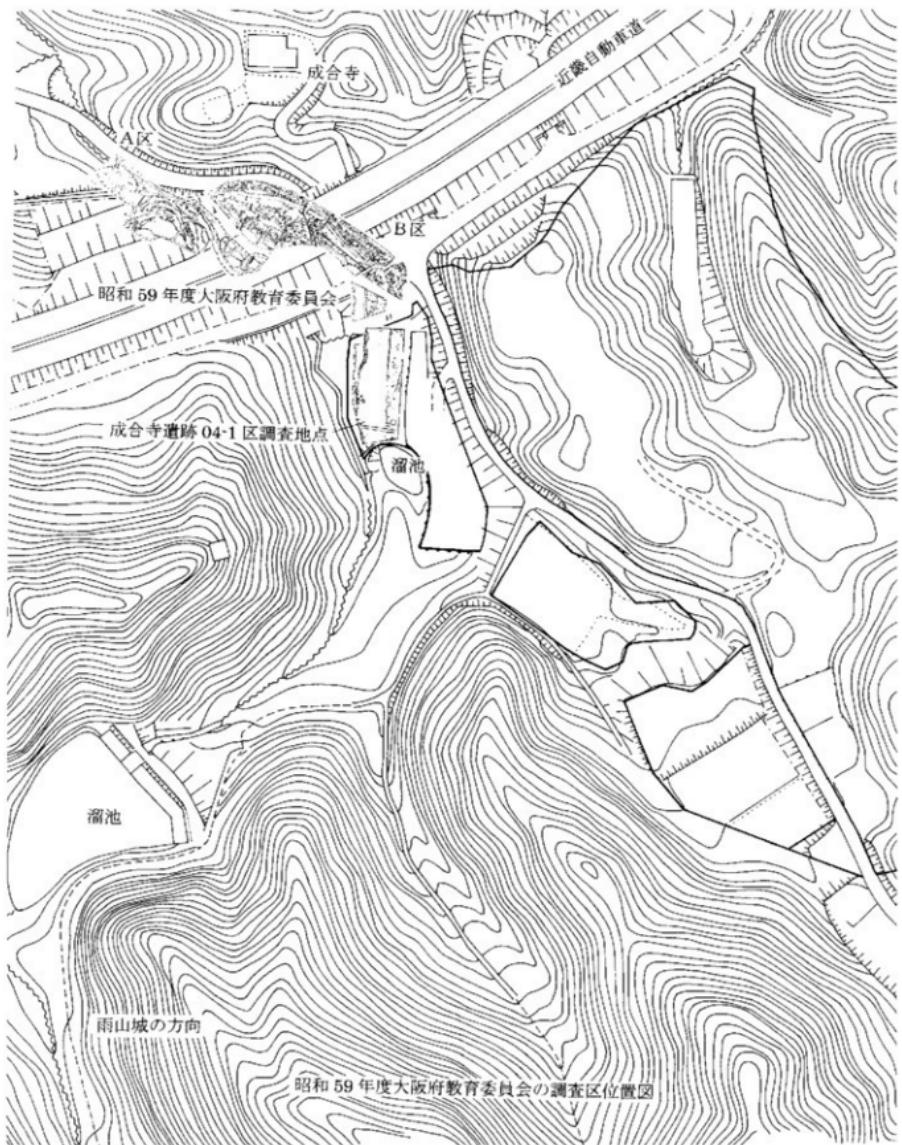
また成合寺については元禄元年(1688年)泉佐野の豪商食野氏が愚白和尚を開山として再建したことも知られている。愚白は肥後の人で黄檗木庵と親しく、加賀前田家に請われ瑞龍寺に3年留まつた後、泉州岡部家の敬仰を受けて成合寺や泉佐野惣福寺を再興したとされている。

「熊取町の寺院」によると、境内の墓地には明徳2年(1391年)在銘の宝篋印塔が存在すると書かれているが、残念ながら平成18年3月現在ではその所在を確認することができない。昭和56年に刊行された「熊取町の石造物」によると、この宝篋印塔は高さ120cmで、泉州地方における完形の宝篋印塔としては貝塚市水間の水間寺の宝篋印塔(1366年銘)に次いで2番目に古いものとされている。またこの「熊取町の石造物」を執筆する際に行われた調査では、成合寺の同じ場所で16世紀代の無銘の宝篋印塔をさらに1基確認したとされている。

これらのことからすると成合寺は建立された14世紀代が最も興隆を見せた時期であり、その後室町時代全般を通して法灯を保つたが、16世紀末に織田氏・豊臣氏の近畿侵攻にともなつて熊取谷全体が大きな災禍を受けた際に成合寺も時運を失つたらしく、元禄期に一度再興した後、維新後徐々に衰亡していったものと思われる。

第3節 雨山について

調査地点のすぐ南西には熊取町の歴史上非常に重要なと考えられている雨山がある。この雨山の頂上には室町時代の南北朝期に南朝方によって築かれた城郭(伝雨山城)があったとされている。現在雨山は奥山雨山自然公園として広く市民に活用されており、麓の成合の集落から南へ400mほど離れた左子池付近から入る登山道を利用すれば1時間弱で頂上に上ることができる。雨山山頂付近には数箇所の削平地があり、雨山神社の祠や小さな集会所が築かれているが、その削平地がいつ頃つくられたのかは不明で、現状では土塁や掘り切り、上橋な



どの中世城郭に関する遺構や石垣・瓦類は確認できない。ただし城郭の愛好家や一部の専門家は雨山山頂に土塁や堀切といった遺構が存在しているとする場合があり、また中世前期の山城の施設は非常に判別しがたいことが特徴であることから、城郭の存在についての真偽は今後の課題である。

「花音三代記」などの文献には、雨山城は文和2年（1353年）以降に南朝方の橋本正督の支配下にあったことが窺われるという。橋本正督は現在の貝塚市橋本を拠点とした南朝の楠木派の一族であるとされる。その後も雨山城は南北朝動乱期の中で南北双方の拠点となり、橋本正督は康暦2年（1380年）に和泉守護山名氏清によって討ち取られ京都に首級を送られたとされている。この後山名義理の支配に入ったが、後世の軍記物「明徳記」によると、明徳の乱中の明徳3年（1392年）大内義弘によって廃城になったとされる。

雨山は現在の府道62号泉佐野打田線（粉河街道）を直接見下せるような位置ではなく、街道からやや奥まで所在している。雨山の南の小さな谷を隔てた山頂に「土丸城跡」があって、粉河街道の真上にはその土丸城跡の方が面している。従ってこの土丸城の方が南北朝期に存在した城郭であり、雨山山上には城が存在しなかったとする説や、雨山山上を本丸とし、土丸城跡を出丸とする説などが存在する。

雨山山頂から少し南側に下った地点にはかつての城主が営んだ「月見亭」があったと言われる場所や、雨山城で使われていたとの伝承をもつ井戸の跡があり、また山頂まで上がる途中の登山道沿いのなだらかな傾斜面には「馬場跡」と呼ばれている場所がある。

近年山頂付近は公園化が進み、平成6年度には「馬場跡」とされる地点の公園整備工事に伴って確認調査を実施した。残念ながら埋蔵文化財は一切確認できなかった。

この雨山に城郭が存在したことを確認するには山頂部や井戸跡と呼ばれる穴などを発掘調査する他に手法は無いと思われる。しかし反対に雨山山上に中世城郭が全く存在していないかったと断定することも難しい。雨山の北麓から山頂へと続く谷筋は明らかに人が往来する山道状になっているが、山道以外の部分は長らく人の手に触れられることなくそのまま時間が経過したと思しき古色を帯びる場所が数多く見られる。

第4節 試掘調査

（仮称）熊取町墓地公園及び自然公園緑地整備事業について、平成16年1月27日付けで熊取町事業部公園課より文化財保護法第57条の3第1項に基づく通知が提出された。申請時の面積は53,111.96m²である。

試掘調査実施期間 平成16年3月1日～3月9日

次頁の図のように申請地全域に42カ所の調査区を設定して機械掘削による試掘調査を実施した。町道朝代成合永楽線を境として東側の丘陵地帯における試掘調査では、埋蔵文化財は一切確認されなかった。またこの丘陵地帯は閉鎖された民間のゴルフコース（ショートコース）が建設された当初に造成を受けており、今回の試掘調査で確認できたのは、丘陵状の部分が大幅に削平されていることと、谷状の場所は大量に切り出された土砂を使って埋め立てた地層が検出された。

町道朝代成合永楽線の西側の谷状の区域の試掘調査では、中世の遺物を含む包含層と炭化物を含む土壤等の複数の遺構を検出した。この場所は昭和59年に大阪府教育委員会が近畿白

成合寺遺跡 04-1 区調査地点



動車道和歌山本線建設に伴う本発掘調査を実施した旧水田と繋がっている場所であり、その時検出されたものと同じ内容の埋蔵文化財が存在していることが考えられた。

第5節 本調査

平成16年12月16日～平成17年2月10日

調査区域

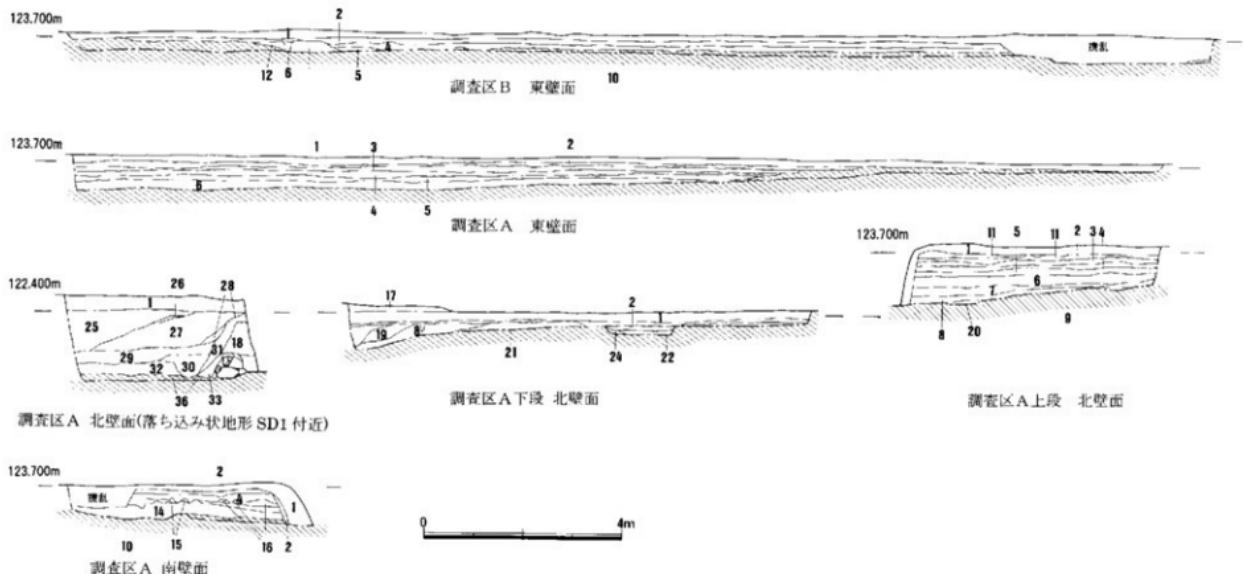
調査区域は先の試掘調査の結果、中世及び古代の上器遺物と溝状の遺構が検出されたトレント28・29・30・31・32・33・34・35を含む総面積743.2m²の範囲を対象に絞り込んだ。調査区域の最外縁部については作業の安全面を優先し、西端を旧水田の畦畔で区切り、旧水田内ののみを調査区とした。町道朝代成合永楽線のある東側は高低差約5mの垂直状の擁壁が迫り、調査掘削することで地盤が崩壊する危険性があったために、擁壁の下辺からおよそ2mの間を残して調査区とした。

調査は排出する土砂の置場を確保する目的から、申請地の中央部を境とし南北に調査区A、調査区Bに分け反転掘りとした。近畿自動車道に近い北側が調査区A、農業用溜池に隣接する南側が調査区Bである。調査区Aは平成16年12月16日から平成17年1月12日までの間、調査区Bは平成17年1月13日から平成17年2月10日までの間実施した。両調査区とともに、概ね機械掘削、人力掘削、精査、撮影、遺構掘削、写真撮影・図面作成、遺構掘削、航空写真測量、埋戻しの順で調査を実施した。

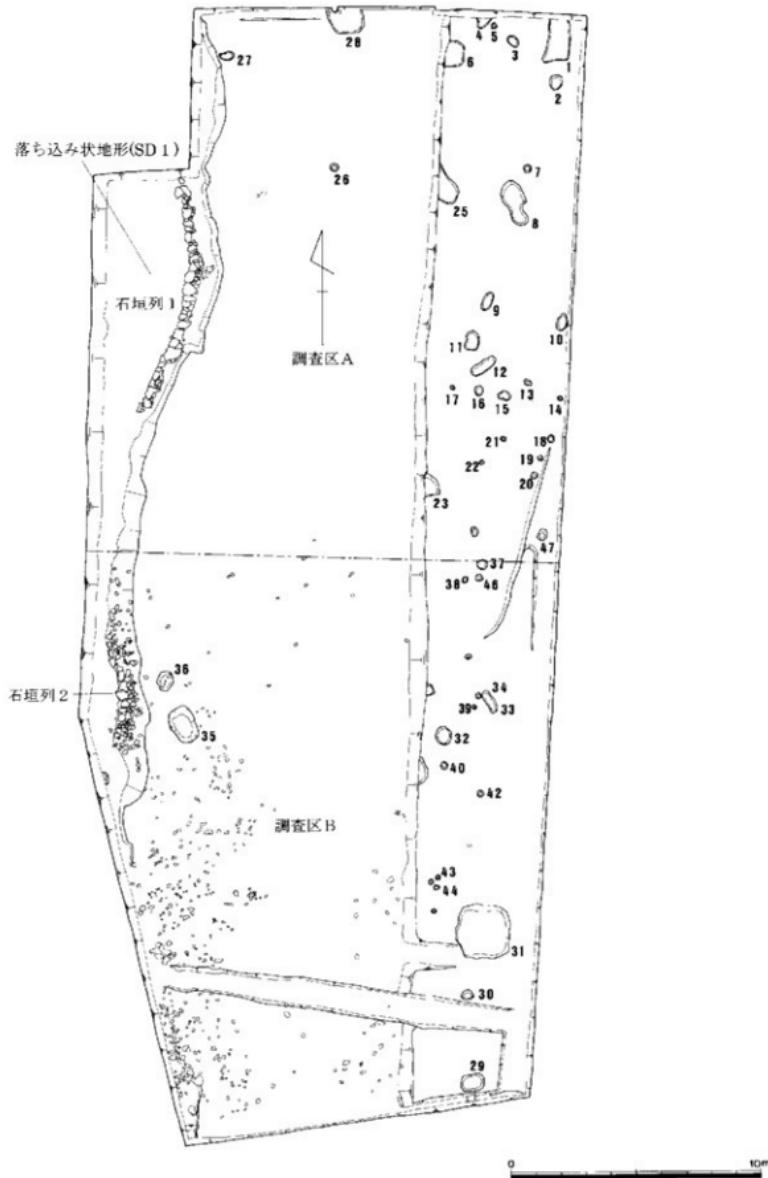
第6節 層

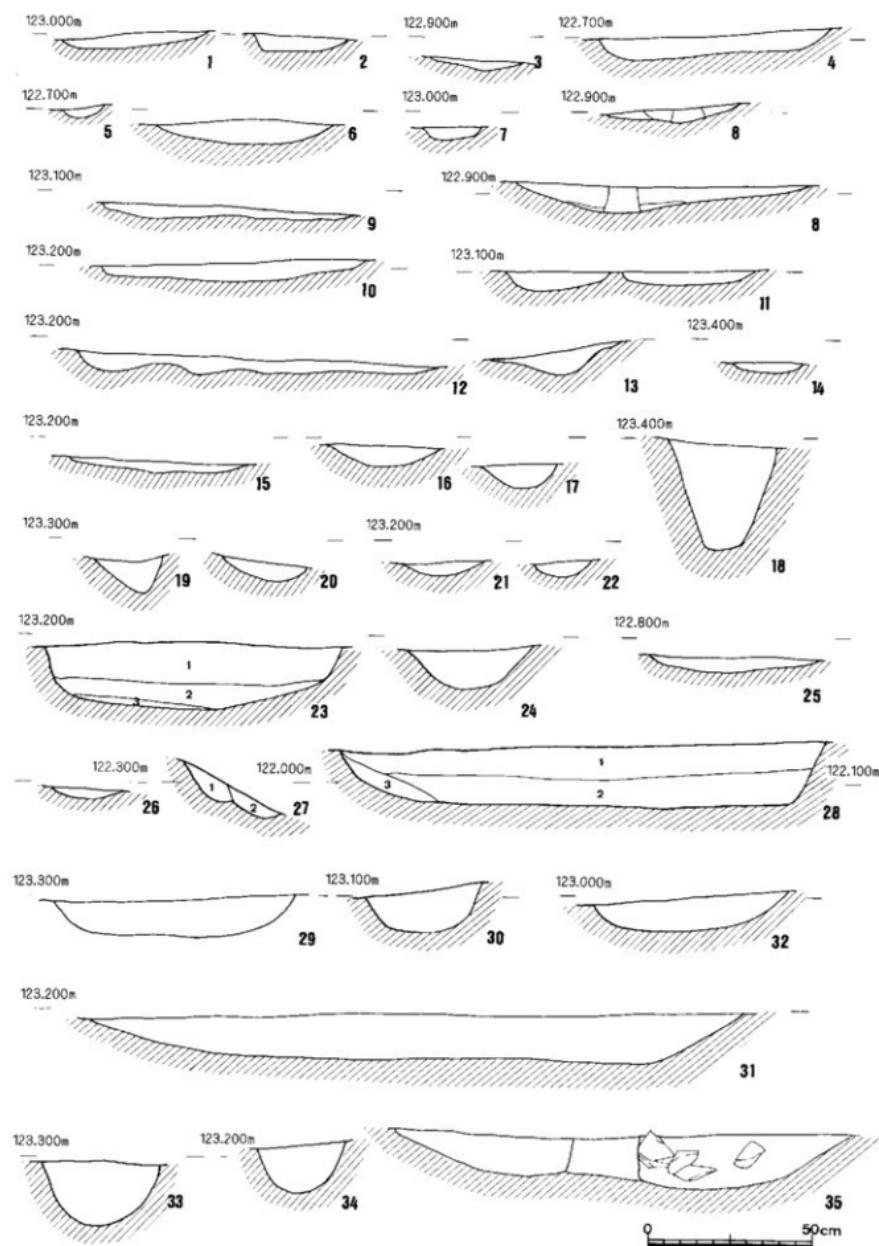
A、B両調査区のそれぞれ東半分の一段（現況で約1.2m）高くなっている区城の壁面（北壁・南壁）の標準的な土層を上から順番に概観する。

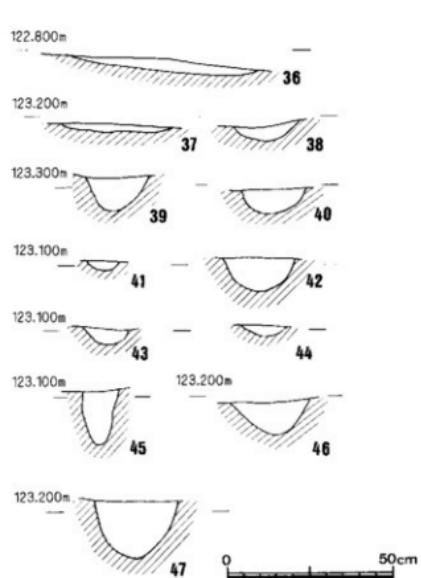
- ①灰黄色 粘質土 耕土 平成16年まで水田が営まれていたもの。
- ②明黄褐色 粘質土 床土 ①水田耕土の床上に相当する上層
- ③にぶい黄橙色 砂質土 中世の耕土系の遺物包含層
- ④にぶい黄橙色 砂質土 ③層の床上と考えられる。中世の遺物包含層
- ⑤にぶい黄褐色 砂質土 中世の耕土系の遺物包含層
- ⑥褐色 砂質土 中世の耕土系の遺物包含層
- ⑦にぶい黄褐色 中世の遺物包含層 この層は見た目に茶褐色で、③～⑥層とは異質な感がある。遺物を含み、この層の上面から掘り込まれた遺構等が存在する。
- ⑧黒褐色 砂質土 この区城のベースとなっている黄褐色粘質土の地山⑨の直上に位置する層。多分に小石や礫などを含み、樹木の落ち葉などが堆積腐食したような黒褐色の有機的な土色を呈していることから、旧来から存在した表土と考えられたが、北壁付近のこの層の下から方形の土壙1が検出されているため、この層は土壙1が成立した後に人为的に築き上げられた土層の可能性が高い。ただしこの土壙1の理上は、層⑧とほぼ同質であり、切り合い関係などが不明瞭だったことから、土壙1は層⑧の上から掘り込まれた可能性がある。⑧層と土壙1の理上はともに黒褐色であるため非常に見分けにくかった。



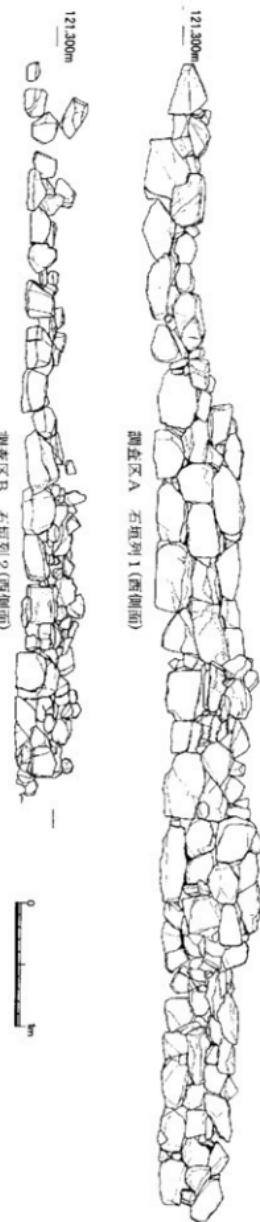
1. 2.5Y 5/2 灰黄色	砂質土(现代耕土)	11. 10YR 7/4 仁京黄褐色	砂質土	21. 2.5Y 7/8 黄色	砂質土	30. N 5/ 灰色	粘土
2. 2.5Y 7/6 明黄褐色	砂質土(现代耕土)	12. 2.5Y 7/4 浅黄色	砂質土	22. 7.5YR 5/2 灰褐色	砂質土	31. 10YR 4/1 鹅灰色	粘土
3. 10YR 6/4 仁京黄褐色	砂質土	13. 2.5Y 8/6 黄色	砂質土(地山)	23. 7.5YR 4/1 淡灰色	砂質土	32. 5G 4/1 暗绿灰色	砂質土
4. 10YR 6/3 仁京黄褐色	砂質土	14. 2.5Y 6/2 灰黄色	砂質土	24. 10YR 5/2 灰黄褐色	砂質土	33. N 4/ 黄色	砂質土
5. 10YR 5/3 仁京黄褐色	砂質土	15. 10YR 7/6 明黄褐色	砂質土	25. 10YR 5/6 黄褐色	砂質土	34. 2.5Y 5/1 黄灰色	砂質土
6. 10YR 4/4 棕色	砂質土	16. 10YR 6/2 灰黄色	砂質土	26. 10YR 7/6 明黄褐色	砂質土	35. 10BG 4/1 暗青灰色	砂質土
7. 10YR 4/3 仁京黄褐色	砂質土	17. 10YR 7/8 黄褐色	砂質土	27. 10YR 6/8 明黄褐色	砂質土	36. 10G 7/1 明绿灰色	砂質土
8. 10YR 3/2 黑褐色	砂質土	18. 10YR 6/8 明黄褐色	砂質土	28. 10YR 7/2 仁京黄褐色	砂質土		
9. 10YR 6/3 仁京黄褐色	地山	19. 10YR 6/2 灰黄褐色	砂質土	29. 10YR 5/1 淡灰色	粘土		
10. 10YR 8/8 黄色	粘土(地山)	20. 10YR 3/3 暗褐色	砂質土	30. 10YR 6/8 明黄褐色	粘土		







調查区B 石垣列2(西側面)



1. 2.5Y	4/1	黄灰色	23. 10YR	4/1	褐灰色
2. 2.5Y	4/1	黄灰褐色	26. 10YR	6/1	褐灰色
3. 2.5Y	4/1	黄灰色	27. 1.10YR	4/1	褐灰色
4. 10YR	3/3	暗褐色	28. 1.7.5YR	6/1	褐灰色
5. 10YR	3/1	黑褐色	29. 2.7.5YR	5/2	灰褐色
6. 10YR	3/1	褐色	30. 2.7.5YR	4/1	褐灰色
7. 2.5Y	4/1	黄灰色	31. 10YR	5/2	灰黄褐色
8. 2.5Y	4/1	黄灰色	32. 10YR	5/1	褐灰色
9. 7.5Y	5/2	灰オリーブ色	33. 7.5YR	5/1	灰褐色
10. 7.5Y	4/2	灰オリーブ色	34. 10YR	5/3	灰褐色
11. 5Y	4/1	灰色	35. 7.5YR	2/1	黑色
12. 5Y	4/1	灰色	36. 7.5Y	2/2	オリーブ色
13. 2.5Y	5/1	黄灰色	37. 7.5YR	6/1	褐灰色
14. 2.5Y	5/1	黄灰色	38. 7.5Y	6/1	褐灰色
15. 5Y	4/1	灰色	39. 7.5YR	4/1	褐灰色
16. 5Y	4/1	黄灰色	40. 10TR	5/2	灰黄褐色
17. 2.5Y	5/1	黄灰色	41. 7.5YR	5/2	灰黄褐色
18. 2.5Y	4/2	暗灰褐色	42. 1.7.5YR	4/2	灰褐色
19. 10YR	5/2	灰黄褐色	43. 7.5YR	4/2	灰褐色
20. 10YR	6/2	灰黄褐色	44. 7.5YR	4/2	灰褐色
21. 10YR	4/1	褐灰色	45. 1.7.5YR	4/2	灰褐色
22. 10YR	6/1	褐灰色	46. 7.5Y	6/1	褐灰色
23. T20YR	5/2	灰黄褐色	47. 7.5YR	5/2	灰褐色
24. 2.5Y	2/1	黑色			
25. 2.5Y	6/8	明黄褐色			
26. 7.5Y	4/1	灰色			
27. 10YR	5/1	褐灰色			

第7節 遺構

◆石垣列

A、B両調査区の西端は西側に向かう落ち込み状の地形をみせており、落ち込みの裾最下段に石垣を検出している。A調査区は調査区西端の北半分の範囲に、B調査区では西端の中央部付近に検出された。A調査区の石垣は残存長9.0m、最大残存高0.81mで、一部では4段を数えることができる。B調査区は残存長6.6m、最大残存高0.54mで、高いところで3段を数えることができる。B調査区の石垣は全体的に何らかの原因による崩落もしくは破壊が大きかったため、元來の形状を残していないものと考えられる。両調査区の石垣に使用されている石材は、調査区の西に存在する小河川に存在する丸い河原石ではなく、比較的鋭利な角と面を保った花崗岩質の石材で、検出されるまで湧水の多い地中に埋没していたからか、あるいは元々地表面に露出して風雨に晒されていたためか、若干の風化が見られ割れやすい。この付近の丘陵斜面の露出した崖部に見られる岩盤とほぼ同質と思われることから、過去に近辺の崖から切り出したものと考えられる。

◆落ち込み状地形 (SD1)

5頁の位置図でもわかるとおり今回の調査区域の西端は、調査区域外に存在する小河川の河原に向かって落ち込んでいく傾斜面 (SD1) であり、この傾斜地は元來より自然に形成されていたものと考えられ、河川と並行しながら南北方向に存在する。しかし調査によって検出された斜面は明らかに人為的に削りこまれたような痕跡があり、裾部に石垣列が構築されているので、石垣が築造される頃に土木工事を受けて大きく改変されているようである。この落ち込み (SD1) は調査区城のさらに西の小河川へと続く連続的な傾斜面を形成するのではなく、後述するように、石垣の直下から西に向かって一定の間隔 (調査区城内でおよそ5m) が平坦になっている。この平坦面は既に地山層に達しており、平坦面は細かな砂層になっている。この落ち込みの底部に存在する平坦面が今回の調査で検出した最深部であり、調査時は排水をする湧水があった。調査区城外の西に小河川が存在することから、当初はこの小河川の河岸部分を人為的に護岸したものとも推測したが、この落ち込み状地形の平坦面と、区城外の小河川の川床面の比高差が存在するため、旧米がこの河川の河岸であったという事由による残存湧水とは考えにくい状況である。埋土は壁面上層にも示したとおり幾層かの堆積が観られるが、短期間に一気に埋め立てた土層を示している。この埋土は比較的新しい所産のもので、この落ち込み状地形 (SD1) と石垣列は近年まで当地に露出していた可能性がある。

◆土壙墓とみられる遺構

●上壙 1

調査区 A 上段の北端の地山面上に検出された上壙で、この調査区で検出した遺構の中では最も古い時期の所産と思われる。北端を北壁で遮られているが、平面形態はほとんど直角な角をもった長方形状を見せ、長さ1.5m×幅80cm、深さは僅かに10cm程度である。埋土は黒褐色の砂質土層で、赤変した焼土や遺物を含まない。

●上壙 2

土壙2は土壙1の約0.4m南側に検出した一辺30cm、深さ5cmの隅丸正方形の小土壙で、埋土

の状況から土壌1とほぼ同時期に成立した土壤であると考えられる。

●土壌8

調査区Aの上段北側で検出した平面不整形の土壤で、長さ1.8m×幅0.9m、最大の深さ20cmを測る。底面に炭化物が検出されるため埋葬に関わる土壤と考えられるが、遺物などは検出されなかった。

●土壌23

調査区A上段面西南隅に下段との崖に半分を削り取られたような形状で検出された焼土壤で、幅0.9m、深さ25cm程を測る。層は3層程に観察でき、最下層は赤色に変色し、その上に夥しい炭化物を含む層が存在する。

●土壌25

調査区Aの上段面西隅に下段との崖に半分を削り取られたような形状で検出された焼土壤で、幅0.9m、深さ10cmを測る。昭和59年に大阪府教育委員会が行った調査によれば、この地域は15世紀に棚田状にする造成で大掛かりな削平を受けているとされるので、その時期に遺構の半分を失ったものか、あるいは近世以降に大きな造成を受けて破壊されたものか不明である。遺構の底面は著しく赤化し、長径のある遺構軸はほぼ北を向いている。

●土壌28

調査区A下段の北壁に遺構の半分を切られる状況で検出している。長径は不明で、短径は1.4m、深さ20cmの焼土壤である。方向は上壌25などと同じく北を示す。検出面まで黒色の炭化物が詰まっている。炭化物は主に二層に区分できる。床面側の方が完全な黒色で、上の層は炭化物を含む埋土である。遺物は一切見られない。土壤底面が赤色に焼けている。規模からすると上墳墓の可能性がある。

●土壌29

農業用溜池に接する調査区Bの最南端に検出した梢円形もしくは隅丸方形の土壤で、南北方向に0.70m、東西方向に0.95mと東西方向に長く、長径の示す軸はほぼ東西である。

この調査ではほぼ全ての遺構を黄褐色粘質土もしくは砂礫層の地山面上に検出したのであるが、この土壤29だけは灰黄色砂質土層の上面に検出されている。この層は元来A B両調査区の直下における地山面の直上に存在するべき層であるが、A地区の北壁付近とB地区の南壁付近に残存する以外は、後代の造成時に地山ごと削り取られてしまっている場合が多い層と考えられる。A調査区北壁、B調査区南壁を観察する限り、この層の最下面は西側に落ちる地山面であり、また最上面は傾斜しない水平状なので、この地に初めて耕地を営むために施した造成の盛土と考えられる。

この土壤の最大の特徴は土壤底面が赤く焼け、その直上に炭化物層が存在するところであり、土壤断面における遺構最下線が凹凸のない緩やかな曲線を描いている。底部がなんら凹凸なく丸くなるように地面を穿つことはほぼ不可能なので、何らかの目的をもって普通に掘削された土壤に対して、ある状況下において必然的に炭化物層の底面がなめらかな曲線状を呈するように堆積したと解することができる。

この土壤29は平面上縦0.95m、横0.7mの梢円もしくは隅丸方形で、かつ断面が曲面を有する形態であったと見ることができる。そしてこの土壤の内面にはべったりと炭化物が付着し、炭化物の直下の検出面は赤く焼け焦げている。炭化物は明らかにこの土壤の中で燃焼し

て、そのまま燃え津となったものであることを示す。この炭化物は燃え尽きる以前から、この土壤の底面に接する部分が既に曲面を呈していたと考えができるだろう。

縦0.95m、横0.7m程度の物体で、土壤の中か上部で対象を焼いたのちに、残留する炭化物の断面が曲線を描くものとして、この場合に最も相応する物体としては、樽形状の物体が燃焼された燃津を考え、いわゆる「米俵」が燃やされたのではないかとの推測が生じる。地面を掘り窪めて、若干可燃性のものを敷き込んだ上に「米俵」のような物体を設置して燃焼させたものと考えられる。米俵とするならば、その中に何が納められていたかは、炭化物の土壤分析等を行っていないので不明であるが、文字通り当初に詰められていた筈の「米」を焼く目的があったとは考えにくく、遺体などを詰め込んで焼却したと考える方が自然である。

●土壤35・36

土壤35は調査区Bの石垣列2の東約2m付近に検出した平面長楕円形の土壤である。この楕円の中心線（軸）はほぼ真北を指しており、今回の調査で検出した同様の形状の土壤群とほぼ同じ方位を示すということがわかる。土壤35は長径1.4m、短径1.0m、検出面からの最大の深さは20cmで、土壤36は直径60cm、最大の深さは4cmの円形の土壤である。土壤35は床面から炭化物が詰まる焼土壤である。土壤36にも土壤35同様の炭化物が見られた。

◆その他の土壤

●土壤6

調査区A上段の北端付近に、下段との崖に裁断され半分を失ったような状態で検出された遺構である。埋土は疊を含んだ橙色で、焼土や炭化物は見らない。土層の質からしても中世以降の水田に関する用水施設（水落とし）の可能性がある。

●土壤31

調査区Bの上段南端付近で検出した2.0m×2.0mの平面隅丸正方形の土壤である。深さは約15cmで底面が平坦状に均一である。この遺構もまた地山面に検出したものではなく、一枚上層の造成土である茶褐色砂質土層の上面から穿たれている。平面は隅丸状になっているが全体がほぼ正方形であることが特徴で、そのことがこの土壤の成立した原因にかかわっていると思われる。埋土は炭化物を微量に含み中世の土師器小皿の破片を検出している。

◆柱穴または杭穴とみられる遺構

●土壤18

この土壤は検出面における直径35cm、深さ34cmと深く、柱穴もしくは杭穴とみられる。埋土は暗灰黄色のやや粘質の一層で、遺物は一切検出していない。

●土壤30

検出面における直径35cm、深さ14cmと深く、柱穴もしくは杭穴とみられる。埋土はにぶい黄褐色のやや粘質の一層で、遺物は一切検出していない。

●土壤32

検出面における直径60cm、深さ10cmの円形の土壤で、埋土は炭化物を含む灰黄褐色の粘質の一層で、遺物は検出していない。

●土壤33

検出面における直径35cm、深さ20cmで、埋土は褐灰色のやや粘質の一層。遺物は検出して

いない。

●土壌34

検出面の直径25cm、深さ14cmで、埋土はにぶい黄褐色の砂質土。遺物は一切検出していない。

●上壌45

調査区Bの上段南端付近に検出された直径10cm、深さ18cmの杭穴状の遺構で、埋土は灰黃褐色砂質土一層である。

●下壌47

調査区Aと調査区Bの両調査区の境界に検出された直径25cm、深さ18cmの柱穴もしくは杭穴とみられる。形状と埋土の特徴は土壌20と類似している。

◆深さの浅い遺構群

調査区Aの土壌3（直径30cm、深さ3cmの円形）、5（直径13cm、深さ4cmの円形）、7（直径17cm、深さ4cmの円形）、9（長さ75cm、深さ4cmの不定形）、10（直径80cm、深さ7cmの円形）、11（直径30cmと直径40cmの二つの円形ピットに分かれる。深さとともに8cm程度）、12（長さ1.2m、深さ5cmの不定形）、13（直径40cm、深さ8cm）、14（直径20cm、深さ3cm）、15（直径60cm、深さ5cm）、15（直径50cm、深さ4cmの円形）、16（直径35cm、深さ8cmの円形）、17（直径25cm、深さ8cmの円形）、18（直径60cm、深さ5cmの円形）、19（直径20cm、深さ10cmの円形）、21（直径25cm、深さ5cmの円形）、21（直径26cm、深さ5cmの円形）、22（直径17cm、深さ4cm）、24（直径33cm、深さ12cmの円形）と調査区Bの土壌37（直径35cm、深さ3mの円形）、38（直径20cm、深さ5cmの円形）、39（直径20cm、深さ10cmの円形）、40（直径20cm、深さ8cmのほぼ円形）、41（直径10cm、深さ3cmの円形）、42（直径20cm、深さ11cmの円形）、43（直径14cm、深さ5cmの円形）、44（直径13cm、深さ4cmの円形）、46（直径24cm、深さ10cmの円形）はほぼ全てが平面円形もしくは不定円形のピット状遺構で、検出面から計測される深さ（残存埋土）はおよそ5cm前後と非常に浅く、性格の不明な遺構といわざるをえない。これらのピット群は後代の削平によって上部を失ってしまっていることが予想されるが、これらの浅いピット群と同一面に土壌18や47といった深さの大きな柱穴状遺構も存在するために、元来柱穴や杭穴を構成し得るものであったかどうかは疑わしい。ピット群は主に調査区Aの南半に分布するように検出されたが、建物を構成するような直線的な配置はこれらのピット間に見ることができない。埋土も主に中世の灰色系統の砂質土であるため、上層に存在する中世包含層の耕作土の一部の可能性もある。これらのピット群は検出面上の凹凸の類かもしれない。

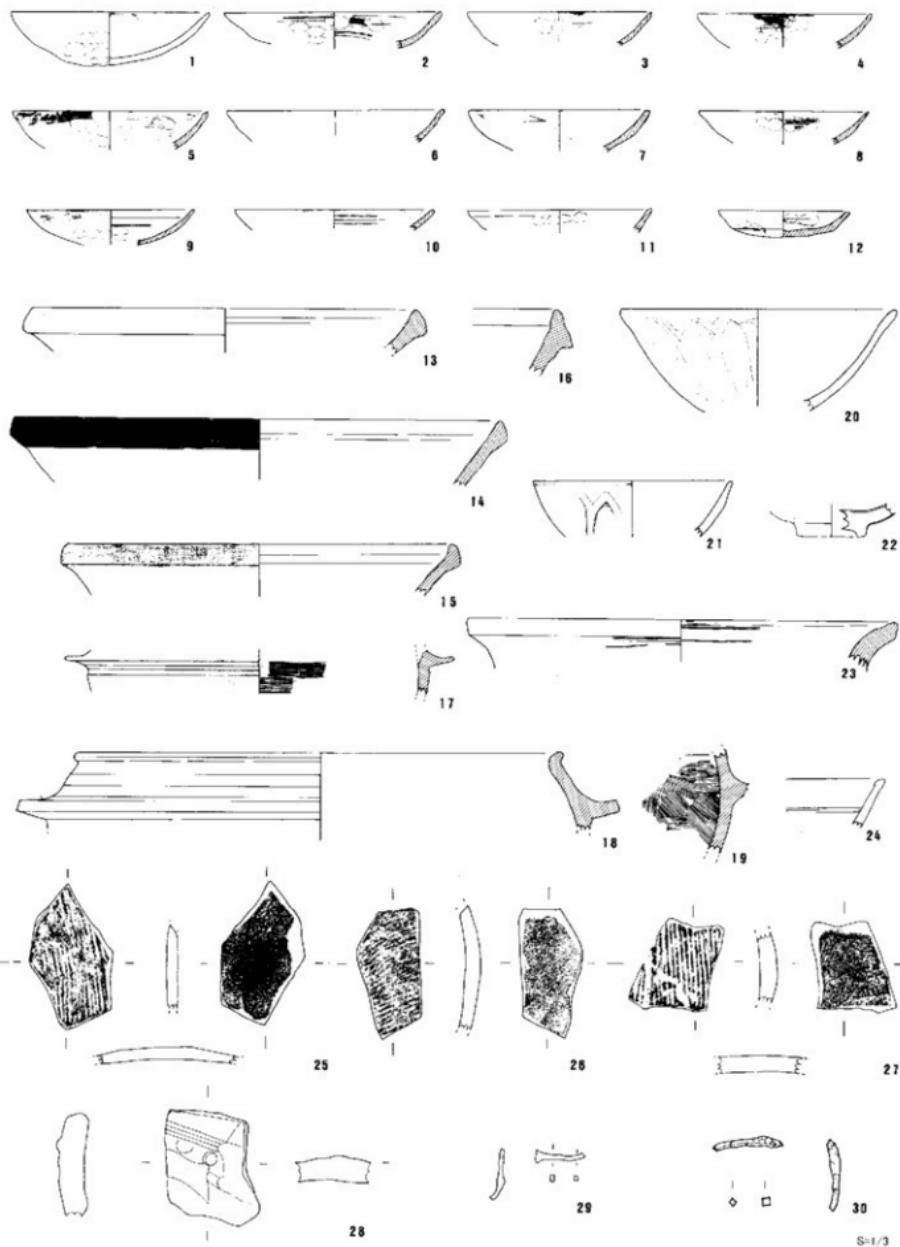
第8節 遺物

遺物については、石垣の山側に接する土中から、扁平かつ小さな瓦器碗で尾上編年IV—3期頃の1が完形で発見されている以外、ほぼ全ての遺物が土器などの3cm四方程度の破片として発見されている。

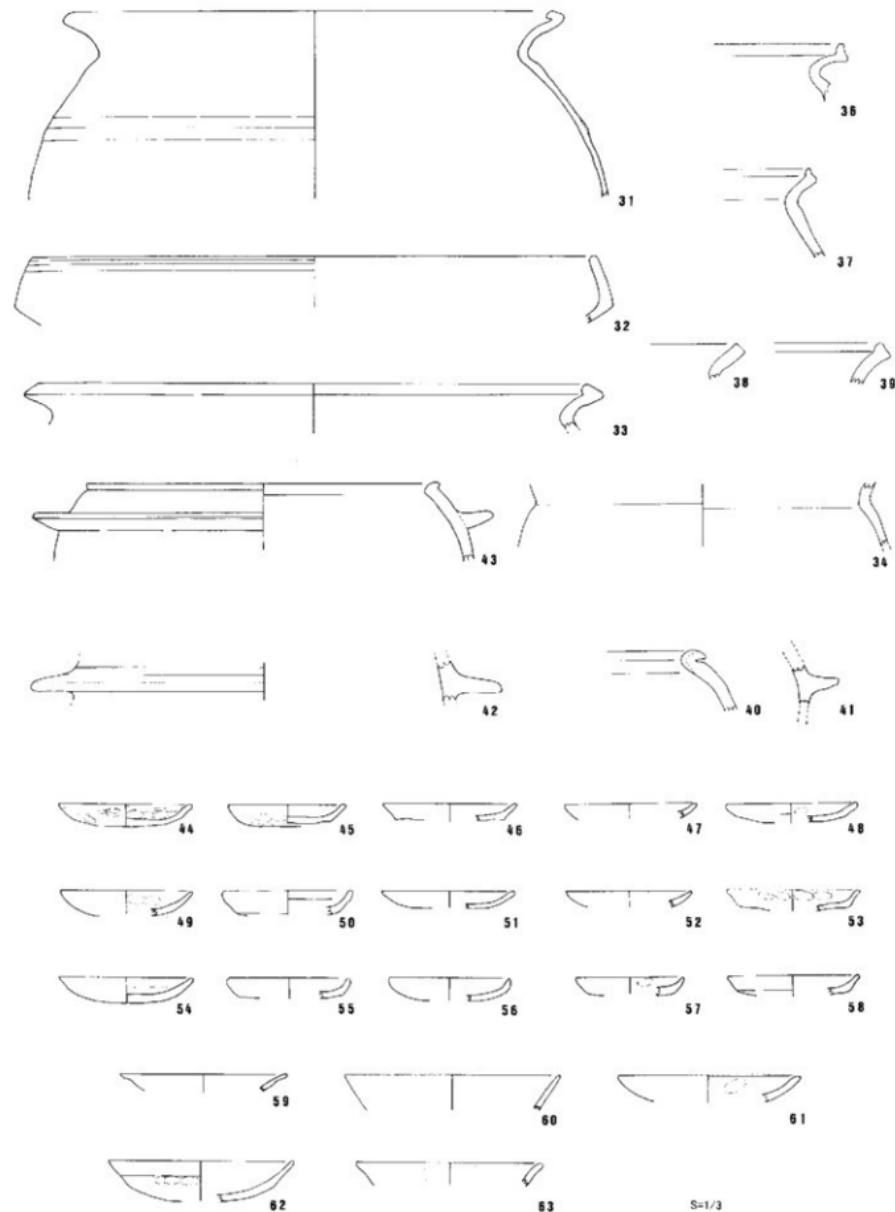
古代土師器（甕40、椀12、羽釜17）

中世上師器（大皿22、小皿28、鉢・火鉢23、羽釜39、器種不明86、白土器（椀）8、大甕（泉州系）3、壁上11）

瓦器（椀82、小皿5、瓦質羽釜34、瓦質甕6）



S=1/3



S=1/3

瓦19

須恵器（甕）13

金属製品（釘）2

陶磁器11（青磁椀3、他8）

数字は破片の点数

以下の遺物の表記は、上器番号（図版・挿図中の番号と共に）・器種・出土地点・法量・特徴の順番。また土器の通し番号の欠番については、特徴に乏しい個体を一部記載していない。

1 瓦器椀

調査区A石垣列1の東側。直径12.0cm、高さ3.3cmを測るIV-2期のほぼ完形の個体で、調査区Aの石垣列1の山側（東側）の落ち込み状地形の埋土内に180°転覆した状態で検出された。高台は粘土紐一本程度の非常に粗末なもので、若干の風化による磨耗などによってヘラミガキと呼ばれる暗文は判別しがたく、当初から暗文が存在していたかは不明である。

2 瓦器椀

調査区A上段。直径13.0cm、高台を欠く残存高2.1cm。III期からIV期にかけての所産と考えられるもので、内外面の劣化が大きい。

3 瓦器椀

調査区A。直径11.0cm、高台を欠く残存高2.0cm。IV-2期。内面（口縁から見込みの内面すべて）にはカーボン痕跡がなく、須恵器に近い灰色の露胎のままで、外面は前面黒色のカーボンが付着していることから、重ね焼きの一一番下位に位置したことを示すものと思われる。

4 瓦器椀

調査区A包含層。直径10.6cm、高台を欠く残存高2.1cm。器形からIV-2期と考えられる個体であるが、遺存状態が悪い。

5 瓦器椀

調査区A。直径11.6cm、高台を欠く残存高2.3cm。IV-2期。内面にヘラミガキ痕。口縁外面にカーボン痕があり、数枚重ねて焼成した時の痕跡と思われる。

6 瓦器椀

調査区A包含層。直径13.0cm、高台を欠く残存高1.8cm。IV期。カーボン剥離大きい。

7 瓦器椀

調査区B土壤 埋土内。直径11.0cm、高台を欠く残存高2.3cm。IV-2期と考えられる個体であるが、他のものと比して器壁が厚い。

8 瓦器椀

調査区A包含層。直径10.0cm、高台を欠く残存高1.9cm。IV-2期の所産と考えられる個体で、内面前面にカーボンが残り、外面は口縁部にカーボンが残るところから、一連の最も上位に置かれて重ね焼きを受けたものと考えられる。

9 瓦器椀

調査区B。直径10.0cm、高台を欠く残存高2.1cm。IV-2期 扁平 内面にヘラミガキ痕。口縁外面にカーボン痕があり、数枚重ねて焼成した時の痕跡と思われる。

10 瓦器椀

調査区A包含層。直径11.8cm、高台を欠く残存高0.7cm。IV-2期 内面にヘラミガキ痕。

口縁外面にカーボン痕があり、数枚重ねて焼成した時の痕跡と思われる。

11 瓦器小皿

調査区A包含層。直径8.0cm、底部を欠く残存高1.4cm。口縁直線的に外反する。二次焼成痕跡あり。

12 瓦器小皿

調査区A包含層。復元直径8.0cm、高さ1.9cm。全体が大きく変形している。外反気味の口縁をもつ。

13 東播系こね鉢

調査区A包含層。口縁のみの残存で、復元直径24.2cm、口縁外面に幅約1cmの黒帯がある。内面にオロシ目などではなく、口縁内面には調整時の回転ナゲ压痕による段差が見られる。

14 東播系こね鉢

調査区A包含層。口縁のみの残存で、復元直径29.8cmと口径の大きな個体で、口縁外面に特有の黒帯が見られる。

15 東播系こね鉢

調査区A包含層。復元直径24.0cm。底部を欠く。内面は無紋。口縁外面の黒帯は狭い。

16 東播系こね鉢

調査区B包含層。特徴的に口縁外面にカーボンが付着しており、残存部における内外面には文様や調整痕跡は一切ない。

17 瓦質羽釜

調査区A上段包含層。鋤部における復元最大直径23.5cm。鋤部は短く、外面が二次焼成のため赤白色化している。

18 瓦質羽釜

調査区A上段包含層。鋤部における復元最大直径36.4cm。復元口径29.0cm。

体部はほぼ全て欠損している。口縁端部を大きく斜め上方につまみ上げた△型に属するものと考えられる。

19 瓦質羽釜

調査区A上段包含層。鋤部および底部を破損。内面ハケ目は12本1単位。

20 青磁碗

調査区A包含層。復元直径16.6cm。高台を欠く残存高6.0cm。稜線の明瞭な蓮弁。

21 陶器碗

調査区A包含層。復元直径11.8cm。高台を欠く残存高3.3cm。外面に非常に薄い蓮弁模様が見られる。内外面にぶい薄黄色の釉が掛けられ表面には非常に細やかな貫入も観察できる。

22 青磁碗

調査区A包含層。高台径4.2cm。外面における高台高0.8cm。高台部の付く底部のみで、黄味の少ない深いある緑色の色調で非常に重厚な高台の特徴から大宰府条坊跡XⅤにおける碗ⅢもしくはⅣ類に類例を求めるのが適當かと思われる。Ⅲ類はF期(XⅦ～XⅨ期)で、13世紀中頃～14世紀初頭前後(鎌倉時代後期)に相当し、Ⅳ類はG期(XⅨ期～)14世紀の標識磁器である。

23 須恵器甕調査区A包含層。復元直径25.8cm。大型の甕の口縁部分のみで、端部をつまみ

上げて、押しつぶすように調整している。

24 陶器椀

調査区A包含層。口縁の小破片のみの残存。口縁端部はわずかにつまみ上げで美しく調整されている。外面前面と内面の口縁部のみに黄緑色の釉が残る。見込み部は露胎である。

25 瓦質甕

調査区B包含層。体部の小破片。比較的器壁が薄く、内外面はカーボンの付着がない灰色である。

26 瓦質甕

調査区B土壌23埋土内。外面に強いタタキ目があり、内面に一次的に生じたと考えられるカーボンが見られる。

27 須恵質甕

調査区A包含層。外面タタキ目が明瞭に認められ、内面に有機物の痕跡のようなカーボン状のものが付着している。

28 鬼瓦

調査区A包含層。鬼瓦の瓦当裾部の破片と考えられる。丸い珠と稜線が見られる。

29 金属製品

調査区A包含層。鉄製の釘と考えられる個体で、一方の端部が頭状に膨らんでいる。残存長は3.2cm、太さは約0.3cmでおそらく一部を欠損している。

30 金属製品

鉄製の釘と考えられる。残存長は4.2cm、太さは約0.35cm 29の個体よりも長さ太さともにひとまわりほど大きく、曲がり折れている。

31 土師器羽釜

調査区A包含層。復元最大直径35.2cm、口径28.0cm。検出したのは口縁部とそれに続く上体部だが、上体部には突帯が完全に剥離した一重の痕跡が残されているため、この個体が羽釜であったことが判明する。口縁端部は上方に摘み上げられながら回転させて巧みに調整されているため、口縁端部内面側にくっきりとした凹線がある。土師質羽釜について比較検討すると、この31は9世紀頃の製品と類似している。

32 土師器鉢

調査区A包含層。復元最大直径35.8cm、口径34.0cm。内面は赤橙色で外面は黒色。胎土は緻密で内外面とも非常に円滑に調整されて、口径が大きく背の低い火鉢のような器種と考えられる。土師質の暖房具については、町内の出土例が少ないが、全国的には平安時代などに数多く存在しているものであり、それらと比較した場合9~10世紀の年代が該当するものと考えている。

33 土師器甕

調査区A包含層。体部を欠く口縁のみの残存で、復元最大口径33.0cm。古代の比較的大きな土師質の甕で、内外ともにカーボンの付着や二次焼成の痕跡は見られない。

34 土師質甕

上体部で口縁を欠損している個体。外面にカーボンが見られ、煮沸の痕跡と思われる。胎土は35より粗粒。

- 35 土師質甕
上体部で口縁を欠損している個体。外面にカーボンが見られ、煮沸の痕跡と思われる。
- 36 土師器甕
調査区A包含層。口縁端部がつまみ上げられた古代の所産と考えられる。下体部にカーボンが見られる。
- 37 土師器甕
調査区A包含層。古代の比較的口径の大きな土師質の甕で、内面にカーボンの付着が明瞭に認められ、外面には見られない。口縁外面に調整時の強いけたれ状痕が観られ、端部はつまみ上げられて調整を加えられている。
- 39 土師器甕
調査区B包含層。古代の所産と考えられる個体で、胎土は粗く口径が大きい。口縁端部を意識的につまみ上げて調整している。外面にはカーボンが多く付着している。
- 40 土師器羽釜
試掘確認調査時：調査区B包含層付近。橙白色の色相で、いわゆるA型に属するものと思われる。
- 42 土師質羽釜
調査区B包含層。鋤部における復元最大直径28.2cm。下体部外面に二次焼成と思われるような赤化色が見られる。下体部は扁平な形状を呈して特徴的である。
- 43 上師質羽釜
調査区A上段包含層。鋤部における復元最大直径27.6cm、口径は27.0cm。鋤の付いた口縁部と体部の一部のみを残す個体で、胎土は緻密で外面は白褐色。40とは類似するものと考えられる。
- 44 土師器小皿
調査区A上段土壤22埋土内。復元直径8.0cm、高さ1.3cm。全体が二次焼成を受けているよう見え、内面は赤橙色、外面に有機物が付着したような痕跡が見られる。比較的短い口縁は内湾した形状である。
- 45 土師器小皿
調査区A包含層。復元直径7.2cm、高さ1.3cm。器壁のかなり赤い中世の最も一般的な小皿である。
- 51 上師器小皿
試掘確認調査時。復元直径8.0cm、高さ1.1cm。非常に粗密な胎土で硬質に焼成されている。口縁は上師器の小皿の中では比較的長めで内湾しており、口縁の下部外面には器体調整時の指ナデによる凹状が明瞭に観られる。
- 52 土師器小皿
調査区B包含層。底部を欠損。復元直径7.6cm、残存高1.0cm。口縁緩やかに内湾
- 53 土師器小皿
調査区A包含層。復元直径7.8cm、高さ1.2cm。口縁は短く直線的に立ち上がっている。体部は外面が指押えのために外反している。
- 54 土師器小皿

調査区B土壌21埋土内。復元直径8.0cm、高さ1.6cm。短い口縁が内湾する。

55 土師器

調査区A上段包含層。復元直径7.6cm、高さ1.2cm。二次焼成による赤化が観られる。

56 土師器小皿

調査区A包含層。復元直径8.0cm、高さ1.3cm。底の中心部を欠損。短い口縁が内湾する。

57 土師器小皿

調査区A上段包含層。復元直径6.4cm、高さ1.1cm。短い口縁は緩やかに内湾する。外面磨耗。

60 土師器椀

調査区A包含層。復元直径12.8cm。古代の所産と考えられる。

61~63土師器椀

遺物の年代は概ね古代と鎌倉時代～室町時代（中世）の二相に分けられると考えられる。破片数40片に及ぶ古代土師器の甕については、熊取町内では他に野田の東円寺跡87-1区、久保の久保城跡98-1区と久保A遺跡00-1区、七山の七山東遺跡99-1区、小垣内の小垣内西遺跡01-1区で同様のものが検出されている。中世については14世紀中盤以降の扁平な瓦器椀を中心とする群と、白い胎土の土師器皿や瓦質の羽釜等15世紀代の所産のものがあり、やや年代幅が存在する。

第3章 まとめ

今回の調査は昭和59年度に大阪府教育委員会が実施した「成合寺」の調査における「B-5地区」の隣接地域における調査であり、昭和59年とほぼ同様の調査成果を得たと評価することができる。

遺構としては近世以降に築かれた石垣列とその石垣を端部に要した用水路もしくは道路のような施設（SD1）を検出しほか、中世期の上塙や細かなピット群を検出した。これらの土壌は火葬もしくは上葬が行われた墓壙と考えられるが、その当時の詳細な状況を再現するまでは至らない。

遺物はほぼ全てが包含層や、掘削時のベルコン排土から見つかったもので、遺構に一次的に残されたような遺物は検出しなかった。

14世紀代の瓦器の椀・皿類や土師器を最も多く検出し、次に東播系と呼ばれる鉢も多く、細かな叩き目の多い瓦質の甕も検出され、瓦質の羽釜も14～15世紀の諸相を呈しており、僅かに検出された青磁も14世紀を示すものと考えられる。また僅かに近世の陶磁器片を検出しているが、昭和59年度に実施された大阪府教育委員会の調査では近世後期の陶磁器の出土によって石垣の年代をその時期に比定する報告がされている。

また明らかに瓦器の年代を遡る比較的口径の大きな土師器の甕が頻見されたが、これらは10世紀前後の平安時代の所産と考えられる。明らかに土師器の椀と確認できる個体も数点以上検出されており、この地点で10世紀前後に何らかの営みが行われたと考えられる。

従って検出した遺物によって、この調査地点で展開した営みを①10世紀前後の時期、②14～15世紀代の時期、③江戸時代という主に三つの時期に分類することが可能と思われる。

①10世紀前後の時期について

この時代この場所で何が行われていたのかということを、検出した遺構から考察することは難しいと思われる。出土遺物が比較的薄手で壊れやすそうな土師質の羽釜や甕、あるいは椀などであり、埋葬などに関わるものというよりも生活に密接にかかわるものであるという判断を促すものであることから、住居などが存在した可能性がある。ただし現在でも民家が一軒も営まれないような奥地であることから、一般的な住居が営まれたことは考えにくい。或いは野天で釜や羽釜を使って料理を作りて椀などに配膳するようなことやそれを儀式化した痕跡なのかもしれない。

②14～15世紀について

方形と円形の土壙の大部分がこの時期の遺構と考えられ、昭和59年度の大坂府教育委員会の調査との照合からも、これらは墓壙と思われる。土壙群はなだらかな自然斜面に営まれたと考えられ、後代の耕作地の造成時に破壊を受けたものも存在している。この場所に何を契機として墓所が営まれるようになったのかはこの後若干の考察を記述する。建物などが営まれた形跡はない。上壙には上壙29の焼土壙など、他の土壙群より新しい所産と考えられるものがあるが、室町時代より後出するものではなく、その後の耕地化で完全に埋没してしまっている。したがって当該時期の様相は、少なくとも墓壙群とその地を睥睨する丘陵上に営まれた寺院が存在していたことができ、大阪府教育委員会の見解によると15世紀代には墓所は大きく廃絶し、耕地化したと考えられている。

③近世について

特に昭和59年の大阪府教育委員会の調査の見解を参照して、石垣は江戸時代の所産と考えられる。調査地点の南東約1.6kmの所には、1772年に築造された「永楽池」という巨大な人工池が存在するので、その下流域に所在する今回の調査地点付近は、「永楽池」と熊取谷を結ぶパイプライン上に位置しており、その用水を下流へと運ぶ施設が存在していたものと考えられる。石垣は江戸時代中期以降に得ることができるようになった用水と何らかの関係があつた施設と考えられる。

内業調査から

●土壙群について

この調査で出土した大部分の遺物が示す14～15世紀代は、この場所に隣接する雨山に城が築かれて南朝方の拠点となったという伝承の時期に該当する。遺物はこの時期の退化した形式の瓦器類や羽釜などが多く、遺構は焼土や炭化物を多く含む上壙をはじめとする平面楕円形もしくは長方形の土壙群であり、昭和59年の大阪府教育委員会が隣接地において実施した調査における脂肪酸分析の結果からすると土壙墓と判断されるものである。なぜ14世紀代以降に土壙墓がこの谷状の場所に築かれたのだろうかと考える際、一つは伝承に残る雨山における南北朝両軍の戦闘で戦死した者を雨山の麓の谷にある河原にそのまま葬るようなことがあったのではないかとも思える。この土壙墓群はある時期に一気に営まれて、すぐに墓域としては廃絶している。昭和59年度に実施した大阪府教育委員会の発掘調査の報告では、この場所は14世紀代に600基もの土壙墓が営まれて、15世紀代に一気に棚田状の水田地帯にする造成工事を受けているという。その際に旧谷状傾斜地に営まれた土壙墓群は段々状の水田を造

り出すために上面を削平されたものと報告されている。

また從来からこの地域の谷間は、熊取に暮らす人々の共同墓地のような施設が計画的に作られたのではないかという考察が行われている。しかし様々な事象を考慮した際、この考察を肯定する資料は乏しいといわざるを得ない。熊取には12世紀の末期頃に現在の熊取町役場付近に「東円寺（廃寺）」が建設され、同時に周辺に集落が発展したことがわかっている。13世紀代にこの「東円寺（廃寺）」はおそらく火災で一気に衰えてしまうが、これまでの発掘調査ではその後の13~14世紀代の遺物も多く、熊取における村落的な営みが途絶えることがなかったことは確実とみられる。従って14~15世紀（14世紀後半を中心とする）というこの成合寺跡04-11で検出された両期における熊取は、山間を切り開いて新しい墓地を営み、多くの人を埋葬しなければならないほど人口が急増した時期に相当するわけでもなく、また村落的な地域社会が再編成されたり、新規に誕生した時期にも該当しないと思われる。この調査で確認された14~15世紀代の土壙墓が熊取の村落形態の変化に伴って新たに造られた共同墓地的な性格のものだったとは確認しにくいのである。また昭和59年度の大坂府教育委員会の調査で検出した数多くの上廣墓もまた14~15世紀頃という比較的短い期間内におさまる年代がうえられており、15世紀代には耕地化したものという調査担当者の所見が付されている。これらの土壙墓群が共同墓地的な性格の墓域であるならば、なぜその後も墓地として存続しなかったのか、あるいはなぜ墓地を壊して本田を営むようなことをしたのだろうかという疑問が残される。大坂府教育委員会が検出した600基もの墓を当該時期に放棄するような事情については、それまでその墓地を利用していた村落そのものがなんらかの理由によって壊滅状態になったり、他の地へ集団で移転していったりした可能性も考えられなくはないが、その辺りの経緯は全く不明である。（あるいはその辺りの事情が、15世紀以前の熊取地域全体の所有者が誰であったのかがよくわかっていないということと関係があるのかもしれない。）

なお遺構のところでも触れたように、今回の調査で検出した上廣29は地面を掘り深めて米俵を焼却したとの考察をする焼土壙である。あるいは人の遺体を米俵の中に籠めて焼却したものかもしれない。焼却した直後に土を被せて埋め戻しているものと思える。

●石垣列について

比較的残存状況のよいA調査区の石垣を観察すると、最下段に80cm×60cmほどの直方体形の重い石材を使用している。この最下段の石材が最も大きなサイズの石材で、下から二段目、三段目には一段目よりはやや小さめの石材を積み上げ、四段目は三段目よりも小さめの石材を積んでいる。大きな石材の間には拳大かそれよりやや大きめの平たい石材を並んで載せ、十分な充填用材としている。上面から見た場合の石垣の幅は約50cm幅になっており、前後に石を二列にしたりする部分ではなく一列に列を形成している。石垣は城郭の石垣のように、山側の斜面に沿って倒しこむ形状に傾斜することなく、単純に垂直に積み上げられているため、高さを確保しようとすれば上段の石材が転落する危険性が発生する。従って調査地点の石垣は元来から四段目以上には石材が積まれていなかったのではないかと推測される。高さ0.8mの四段積みであることから、城郭などに見られる有事の防衛の目的で築かれた石垣とは性格が異なる。また斜面の底部裾に巡らされており、石垣を築かなくとも本来が割合急な斜面であることから、農作物を荒らす野生動物の侵入を防ぐ獅子垣のような類でもないと思われる。

開削した土地の崩落を防ぐ目的で、集落や棚田の周囲を石垣で固めた例を現在も山間部で見ることができるので、そういう目的で造られた石垣を考えるのが妥当であり、昭和59年に大阪府教育委員会が実施した調査でも数箇所から石垣列が検出され、同調査ではこれらを近世の農業用石垣（階段状水田の擁壁的なもの）と認めている。昭和60年度に刊行されている同報告書「成合寺」の図版で確認する限り、今回検出した石垣と非常によく似ていることが窺われる所以で、今回検出した石垣の用途を考える場合には、近世に存在した水田の擁壁としての石垣との見解を参照するべきだろう。

また他に、検出した落ち込み状の遺構（SD1）が調査区の南端に存在する溜池の水をひくような用水路であったと仮定した場合、石垣は水路を護岸した水路敷きであった可能性が考えられる。山間部に通有の棚田について詳細な観察データが揃っていないため一概には記せないが、この付近に存在する棚田では、上段の棚田から下の水田に向かって用水が流れる水路が存在したものと考えられ、その水路は下位の水田端部の畦横に設置されていたものと考えられる。南部にある永楽池を始とする溜池が築造されたのが江戸時代であるため、もし溜池の付属的な施設とするならば、その時期の所産である。

また落ち込み（SD1）は近世以降水路であった可能性が高いものの、当初は水路ではなく平坦な道路であった可能性も考えられる。落ち込み（SD1）の底部には砂粒や礫の多い非常に幅の広い平坦面を形成していることから、雨山の東北部や永楽池へと続く道路であった可能性があり、道路肩に石垣が積まれていたのではないかとも考えられることも付け加えておく。

この小河川を含む谷状地形は現在の成合集落からまっすぐに町の最南部に存在する巨大な永楽池の方向に向かって伸びている。この調査区では古代から中世の所産である遺構および遺物が多く検出されていることから、江戸時代に永楽池が建設されて、用水路が確保される以前にも、この谷筋に人々の出入りがあったことが確実で、そのような人々が使用する道路が設置されていた可能性がある。その道路がこの谷のどの位置に敷設されていたのかは不明であるが、丘陵の中腹を切り裂いて作られている現在の町道朝代成合永楽線がそのままかつての道路であった可能性があるにしても、そのような大きな土木工事を古代あるいは中世に行い得たかは定かではない。むしろ今回の調査区のように丘陵の裾にあって小河川の自然堤防のような比較的の低位置に人々の往来を行する道路が存在していたと考えることもできるのではないだろうか。

他に石垣から観察できる事項について、石垣に用いられている石材を観ると、それらは若干の加工を施した切り石群で、いわゆる野面積みなどと呼ばれる形式で積まれ、石材の100%が周辺の崖面から切り出した岩片に若干の加工を施したものである。この調査地点のすぐ西側には谷底を下る小河川が存在し、ある程度の大きさの河原石を採取できるのにも拘わらず、このように付近の岩肌を打ち砕いて石材を確保していることからすると、この石垣は単に水田の敵を区画するような目的で貼り巡らされた石垣であったのかどうかという点に対して疑問が生じる。石材の積み方あるいは石垣面の凹凸の調整の仕方はなかなか巧みであるため、石垣作りの知識が豊富で、作業人夫を動員する組織が存在したことが考えられる。（今回検出した石垣と全く同様の所産の石垣は昭和59年度の大阪府教育委員会の調査でも確認されているが、その他では今のところ見つかっていない。現在の熊取町の内外を問わず、同様の石垣

の検出例もしくは遺存例があれば参考にしたいところである。)

●瓦器椀1について

唯一の完形の遺物である瓦器椀1は、調査区Aの石垣列1が敷設されている落ち込み状の斜面（SD1）の埋土の中から検出されている。石垣列1の谷側の埋土ではなく、山側の埋土から検出されている。この落ち込み状地形（SD1）はこの瓦器椀1がこの場所に放置（放棄）された時点で、既に存在していたものと考えられ、瓦器椀1は転落したままになっていたものか、もしくは石垣列1を敷設する段階で、その裏込め土の中に混入したものと考えられる。遺構のところでも述べたが、この落ち込み状地形（SD1）は石垣列1を設置する目的で切土工事を行って生じた傾斜面ではなく、元来から存在していた自然の地形であると考えられる。

また石垣列1が設置された時期はこの発掘調査で検出した全ての遺構の最も遅い時期（おそらく近世以降）と考えられるために、石垣が設置された後で石垣の山側の凹状の場所に、完形のままの瓦器椀が転落したことは考え難い。

この瓦器椀は完形であるのにも拘わらず、内外両面に磨耗（風化）が見られることにも若干の注意を喚起される。包含層などから検出される破碎された上器破片は、廃棄物として耕作等の整地の工程（田畠起こし等）で粉々になったり、耕作泥土中で風化したりするが、完形の上器はたいてい耕作等における激しいローリングを経た経緯がないので、破損や風化は進まない。

従ってこの瓦器椀はかつて放棄されるまでの間に、完形のまま長く風雨に晒されて劣化したものか、或いはただ一度の何らかの工程で土中に混入した後、土質が潤湿だったために内外両面が劣化したものと推測される。

●瓦

破片にして19点の瓦片が出土している。28のように鬼瓦の破片らしき個体や瓦当を欠いた軒丸瓦片も含まれている。これらはいずれも磨耗が大きな小片であるため実測には適さないが、比較的分厚い断面を有し、剥離の容易な黒いカーボンが残るなどの特徴から室町期の所産と考えられる。また昭和59年度の大坂府教育委員会の調査では、一石五輪塔の空輪、風輪などとともに、B-3地区、B-7地区、A-1地区から巴文軒丸瓦を含む相当数の瓦片が出土している。これらの地区の北側には成合寺が存在するため、大坂府教育委員会では成合寺の転落瓦と推定している。

熊取町の発掘調査で出土した近世より前代の古瓦の出土場所は、野田の旧東円寺の周辺、和田の米迎寺境内など、いずれもかつて寺院が存在したと推定される場所であるため、今回の瓦群は成合寺もしくは以前に存在した寺院の瓦と考えられる。



調査区A全景（航空写真）



調査区B全景（航空写真）



調査区A北端部分



調査区A全景



調査区A北壁



調査区Aの南端付近



石垣構造



調査区A石垣列検出状況（西から）



調査区A石垣列検出状況



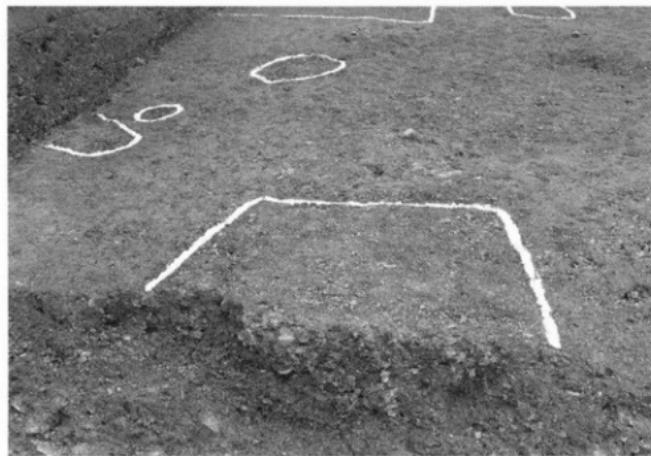
調査区Bの石垣列検出状況



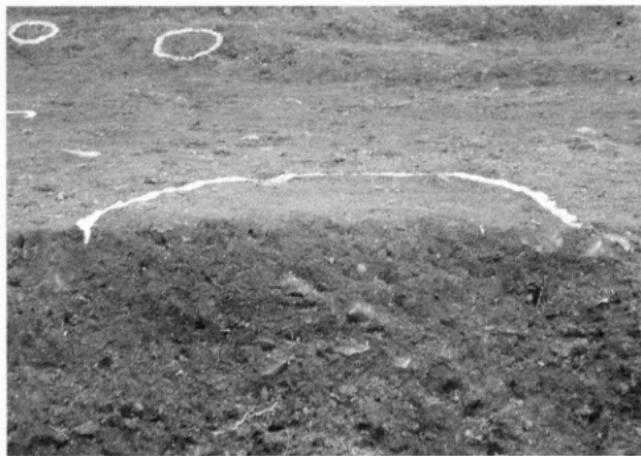
土壤1~5



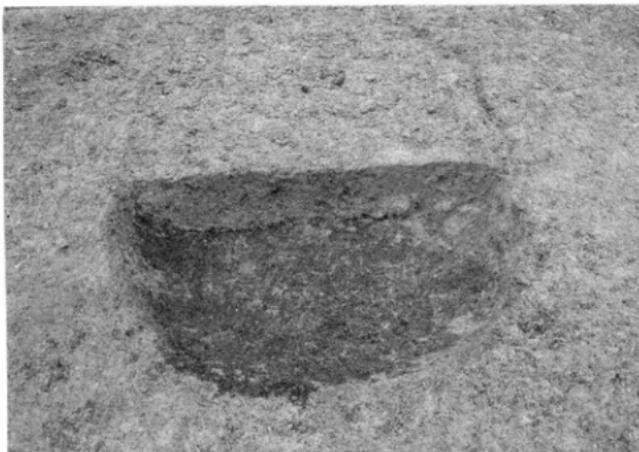
調査区A石垣列検出断面



土壤26



土壤23



土壤29



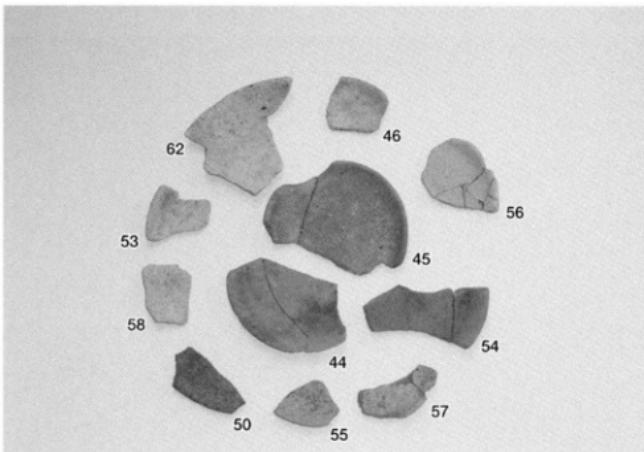
土壤28



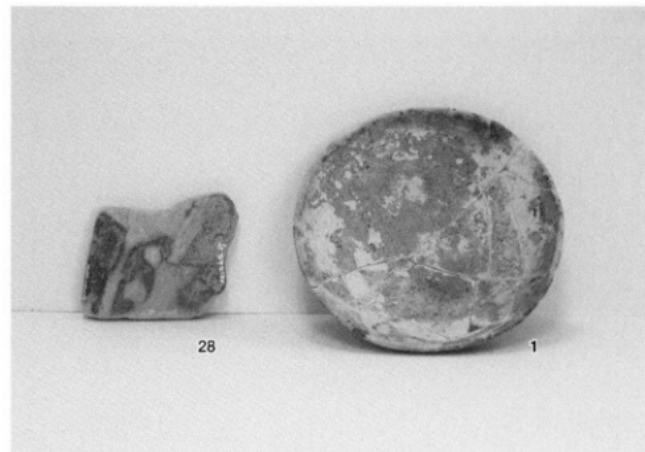
土壤35



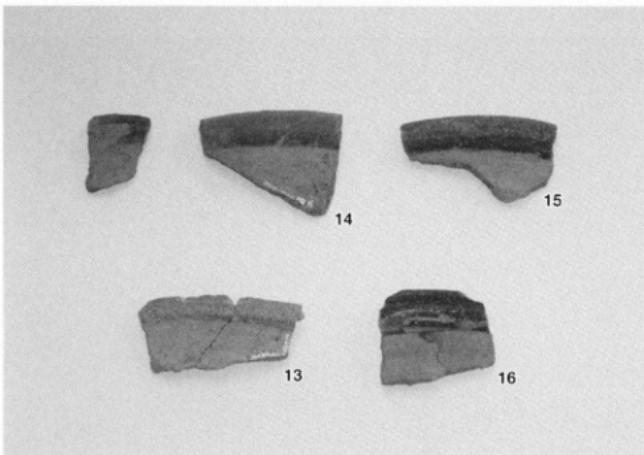
土壤31



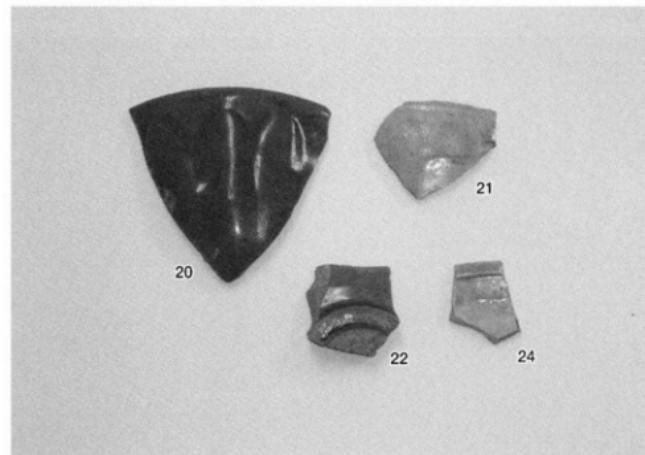
土師器皿



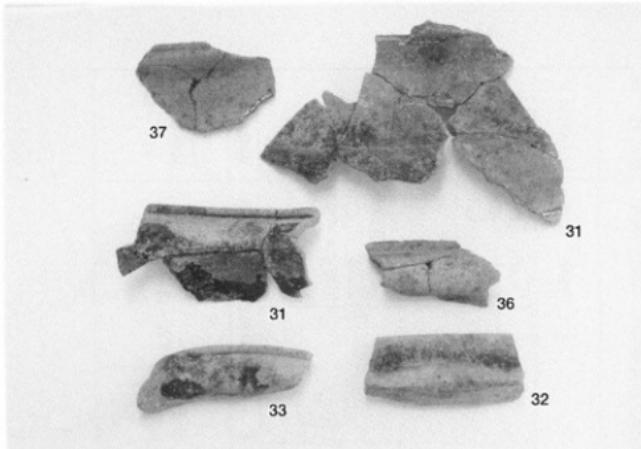
瓦・瓦器



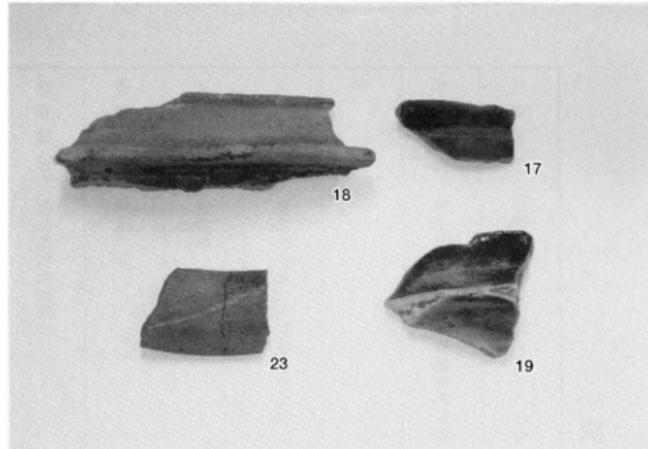
瓦質鉢



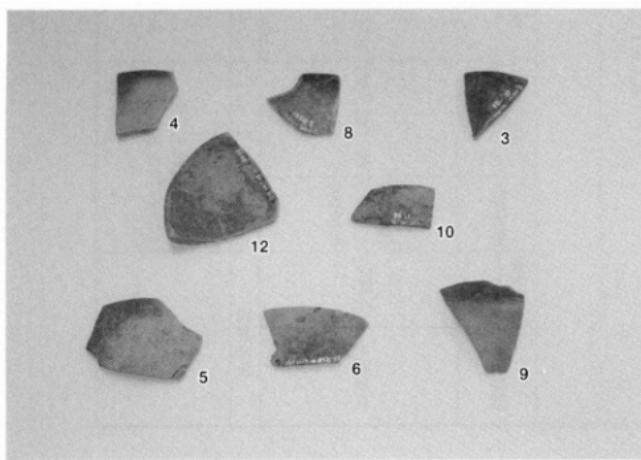
陶磁器類



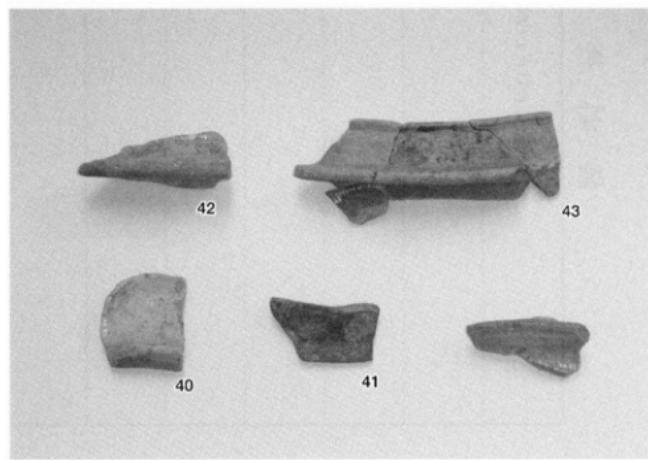
土師器甕



瓦質羽釜



瓦器椀・皿



土師質羽釜

報告書抄録

ふりがな	じょうごうじいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ						
書名	成合寺遺跡発掘調査概要報告書						
卷次	I						
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第46集						
編著者名	前川 淳						
編集機関	熊取町教育委員会						
所在地	〒590-0495 大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号						
発行年月日	西暦 2006年3月						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″	m ²	
成合寺遺跡 04-1区	熊取町大字野田 大阪府泉南郡	27361	8	34° 23' 12" 12	135° 22' 20"	20040301 ~ 20050210	743.2 公園造成
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
成合寺遺跡 04-1区	寺院跡	中世～近世	石垣・土壤・ 自然斜面切上造成	古代土師器甕・ 中世瓦器類			

熊取町埋蔵文化財調査報告 第46集

成合寺遺跡発掘調査概要報告書・I

発行日 平成18年3月

発行・編集 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号

印刷 小笠原印刷（株）

大阪府泉佐野市上瓦屋646番地